

英語における Wh 語 + 不定詞構文 についての一考察

安藤 裕 介

0. 序

Jespersen(1940)以来，独立節における wh 語と不定詞の結合パターンは以下のようにになると指摘されてきた。

- (1 a) When to give a money
- (1 b) Where to give a money
- (1 c) How to give a money
- (1 d) What to give a money
- (1 e) Why give a money ?

要するに，(1e)からわかるように why が使われている場合は，その後に原形不定詞が続き，疑問形になるが，(1a)～(1d)からわかるように，それ以外の wh 語の場合（本稿では，how も wh 語の1つと見なしている）は to 不定詞が続き，肯定形になると指摘されてきたのであった。

しかし，この分布の不完全性については早くも Bolinger(1957)において指摘されている。

- (2 a) How tell the difference ?
- (2 b) Where expect any better treatment ?
- (2 c) When prepare for what will never come ?

(Bolinger 1957)

さらに(1a)～(1e)の分布の中で最も特異な例である(1e)に対応する形，即ち why to give a money も状況によっては可能であるという指摘も最近なされてきており，独立節における分布のパターンの精密化の必要性がでてきている。その点を踏まえて現状で考えられるこの構文の分布のパターンは次の様なものになると考えられる。

(3) 独立節における Wh 語＋不定詞構文のパターン

(a) to 不定詞の場合

(肯定形)

When to give a money

Where to give a money

How to give a money

What to give as a bribe

Why to give a money

(疑問形)

When to give a money ?

Where to give a money ?

How to give a money ?

What to give as a bribe ?

???

(b) 原形不定詞の場合

When give a money ?

Where give a money ?

How give a money ?

What give as a bribe ?

Why give a money ?

この表から沸き上がってくる問題点は次の4つである。

- ① なぜ肯定形に原形不定詞は存在しないのか？
- ② そもそもto不定詞と原形不定詞に意味の相違はあるのか？
- ③ なぜ疑問形の場合 why＋to不定詞は存在しないのか？
- ④ 伝統的分布(1)と分布の完全なパターンである(3)との関係はどうとらえるべきか？

この4つの問題に対して独自のアプローチに基づく議論を展開したのが

Duffley and Enns(1996)である。彼らは3つのパラメーターを用いて、この問題に対する見解を示している。その3つのパラメーターとは(I)不定形の意味(II)toの意味(III)話し手によってwh語がどのように知覚されているかである。

結局のところ、そこでの議論は、彼らも述べているように話し手側に立脚したアプローチである。それは、どのような形式で自己の意図を表現するかは、基本的に話し手がどのように状況を理解しているかということに依存しているからであると彼らは考えている。

確かにそうかもしれないが、筆者は聞き手に依存したアプローチも組み込んだ方が望ましいのではないかと考えており、後でそのことについては触れることにする。そのことも含めて、(彼らのこの構文に対する分析は全般的に見て秀逸であるけれども)彼らの分析の問題点を指摘し、その改善案、代案を提示することを本稿の目的とする。

1. Duffley and Enns (1996) の分析

本章では、本稿の議論を容易にするために、Duffley and Enns (1996) (以下 D&E)の分析を概観していく。D&Eは、上述した(I)不定形の意味(II)toの意味(III)話し手によってwh語がどのように知覚されているかという3つのパラメーターを用いて議論を行っている。

不定詞の標識toがあるかないかで意味・ニュアンスが異なるとしてBolinger(1974)以来よく取り上げられるのがhelpであるが、D&Eでも取り上げられている。

(4a) I helped John finish his thesis.

(4b) I helped John to finish his thesis.

(4a)の場合、Johnが論文を終わらせるのに、話し手が直接関与している。例えば話し手が実際に論文を書いてやったということが示唆されるが、(4b)ではそのようなことは必ずしも示唆されない⁽¹⁾。即ち、話し手が、

John の論文に直接関与する必要はなく，例えば話し手が知り合いを John に紹介してその知り合いが John の論文を手伝ったということなどが考えられる。

Duffley (1992) では，不定詞標識 *to* は不定詞で表されている出来事の実現をひきおこす効果をもつとしている。即ち，*to* がある場合は，助けることそれ自体が，助ける人が行為を行うための前提条件となっているが，*to* が無い場合は，出来事が，助ける人と助けられる人が同時に協力しているものにとらえられるのである。要するに，不定詞標識 *to* の意味が，不定詞表現によって示される出来事が動作の終点になることをひきおこすものとしてとらえられるのである。このことを明確に示しているのが D & E の以下の図である。

(5) *help* の場合：

BEFORE	<u>TO</u>	→	AFTER
「助けること」が，助ける人が出来事を実現させることを可能にする前提条件と見なされる			「出来事を実現させること」が，助ける人によって与えられた条件の帰結と見なされる

要するに不定詞の出来事と主動詞によって表された出来事の間には時間的前後関係が設定されるのである。したがって，その意味から考えて，願望を表す動詞の場合，その前後関係がより明確になる。

(6) *want* の場合：

BEFORE	<u>TO</u>	→	AFTER
「欲すること」が不定詞の出来事の実現を要求するものと見なされる			「出来事を実現させる」ことが，未来に実現可能な願望の対象と見なされる

(4b) のような場合，話し手の目的語の John は *helping* の *patient* であると同時に不定詞の出来事の *actualizer* であり，John が *patient* であると知覚される時と，実際に行為が実行される（論文を終える）時との間に時間的前

後関係が成立している。

(7a) I managed to call three people.

(7b) I tried to call three people.

ここでは managing や trying の agent として I が知覚される時と ‘calling three people’ という出来事が実現される時との間に時間的前後関係が成立している。だが before-after という時間的前後関係が問題にならない知覚動詞の場合は不定詞標識 to をおくことは不可能になるのである。

(8) I watched him call nine people.

ここでは him が calling の agent であり，また話し手の watching の patient である。そして，それが同時におこっているのである。このことから help＋目的語＋原形不定詞の場合もその仕事が行われていることを説明できる。

D&Eはこのような立場に基づき通常，統語的問題と見なされている助動詞の後の to の生起を意味的に，即ち，before-after という時間的前後関係があるかどうかということで説明している。

(9) He needed to ask her a question.

(10) He dared to ask her a question.

(9), (10)の場合，before-position では ‘needing’ ‘doing’ それ自体が想定されており，after-position では ‘asking her’ の実現される時が想定されている。しかし，疑問文や否定文の場合，それらの文の本質的性質から before-position では ‘needing’ や ‘doing’ それ自体は想定されていないのである

(11a) Need he find out?

(11b) He needn't find out.

(12a) Dare he ask her a question?

(12b) He dare not ask her a question.

ゆえに before-after の時間的關係は成立せず，不定詞標識 to の使用は不可能になるのである。

結局，助動詞一般について言えることだが，Langacker(1978)が指摘するように，助動詞には本質的には時間軸において potentiality を有するという特性があり，そのことはとりもなおさず，不定詞の出来事に対しての before-position を形成しないということを意味しており，不定詞の出来事の現実に関する関係を規定するだけになっている。ゆえに助動詞では before-after という時間的關係が成立せず，不定詞標識 to が使用されないと考えられるのである。

(13a) You must know all this for the exam next week.

(13b) You have taken this course before. You must know
all this already.

(14a) He may own a Mercedes by next year.

(14b) He may own a Mercedes. I'm not sure whether he
does or not.

これまでの議論に基づいて独立節における wh 語＋原形不定詞について考えてみる。代表的な例は how to＋不定詞である。

(15) How to win an election:

(16) How to read Donald Duck:

これまでの仮説に基づいて説明を試みるならば，before-position は，不定詞の出来事の予想される actualizer が手段ややり方を身につける時（(15)で言えば立候補者が選挙の勝ち方を身につける時）であり，after-position はその人がそれを実現させる時（(15)で言えば，選挙に勝つ時）である。要す

るに before-after という時間的關係が成立しており，不定詞標識 to の使用が正当化されるのである。

where＋to 不定詞の場合も同様である

- (17) Stock photo and assignment source book: where to find photographs instantly.

この場合 before-position は不定詞の出来事の予想される actualizer がその出来事の実現に対してその場所を認知する時（そのような場所があるということを知覚する時）であり，after-position は，実際にそれを実現させる時（実際にその場所を見つける時）である。要するに，before-after という時間的關係が成立しており，不定詞標識 to の使用が正当化されるのである。

when＋to 不定詞の場合も同様である。

- (18) When to sell stocks: Portfolio Liquidation; the Key to Superior Performances without Stock Selection

この場合，before-position は不定詞の出来事の予想される actualizer がその出来事の実現に対して適切な時があるということに気づく時（この場合は，株を売ることに関して）であり，after-position は実際にそれを実現させる時（実際に株を売る時）である。要するに，before-after という時間的關係が成立しており，不定詞標識 to の使用が正当化されるのである。

what＋to 不定詞の場合も同様である。

- (19) What to Do When the Taxman Comes: the Inside Story on How to Cope with Canada's Tax Department

この場合，before-position は，不定詞の出来事の予想される actualizer がその出来事の実現に対して適切な具体案があるということに気づく時（この場合，税務署の人間が来た時にどういった行動をとればいいのかに関して）で

あり, after-position は実際にそれを実現させる時 (実際に行動をとる時) である。要するに, before-after という時間的關係が成立しており, 不定詞標識 to の使用が正当化されるのである⁽²⁾。

why+to 不定詞については, 前述したように, 多くの文法家によって不可能な構文であると指摘されてきたが, 現実には why+to 不定詞構文の例についてもいくつか指摘されており, これまでの文法家の指摘は必ずしも正しくないということがわかる。

(20) Why to ban birthdays

(21) Radio:How, When and Why to Use it.

このような例が存在する以上, why+to 不定詞についても, 他のwh構文と同様のことが言える。例えば, (20)の場合, before-position は, 不定詞の出来事の子想される actualizer がその出来事の実現に対して, 適切な理由があるということに気づく時 (この場合, 何故, 誕生日を祝うのを禁止するのか) であり, after-position は実際にそれを実現させる時 (実際に誕生日のお祝いをやめた時) である。要するに before-after という時間的關係が成立しており, 不定詞標識 to の使用が正当化されるのである。

続いて, 他の wh 語+原形不定詞構文より頻繁に生起する why+原形不定詞構文について考察する。

(22) Why be old?: how to avoid the psychological reactions of ageing.

この why+原形不定詞構文と上述した why+to 不定詞構文が共に生起しうることについては明確な理由がある。それらを使用する際の話し手の認識の相違がそれらの2つの構造の存在を可能にしていると言える。前者の場合, 不定詞の出来事が生起したり, 遂行されたりすることに対しての理由を話し手が理解できないと言える。一方, 後者の場合, 不定詞の出来事が生起したり, 遂行されたりすることに対しての理由を話し手が理解できる場合だと言える。

これらのことから次のようなことが考えられる。why＋原形不定詞構文が使用される場合、上述したように、不定詞の出来事が生起したり、遂行されたりする理由があるということをし話し手が認識できない場合であり、その際、話し手がその理由の存在について真剣に疑問をなげかけているのである。したがって、この構文が使用されている場合は全て疑問形であり、そのほとんどが修辞疑問文であるのは、納得のいく事実であると言えよう。なお、当然のことながら、この場合、before-after という時間的關係は成立しない。

(23) Why Choose Fidelity For Your Keogh ?

- Investment choice and flexibility
- Dedicated Retirement Specialists

.....

このような用法は広告でよく使われており、その商品について何も知らなかった消費者に、その商品を買う必要があると訴えている。つまり、何も知らなかった消費者に情報を提供することによって、その無知の救済を提案しているのである。消費者は何も知らないという前提の取り消しを提案しているのである。who でも同じような例は見られる。

(24) Who ever thought there would be a weekly news magazine for home and apartment builders ?

次に how＋原形不定詞構文に移る。(もっともこの例はあまり見られないのだが。)

(25) He could not look at her, he stood helpless, pale, hang-dog. Every word she said was justified, and how tell her that he could do no often than he had done? How tell her that it would have been an outrage, a sin, to continue as her lover? He almost cringed from her and the birthmark stood on his

yellow face like a splash of ink.

ここでもやはり話し手が wh 語が指示するものについて疑問を感じているのである。不定詞の出来事の遂行される手段・方法を想像できないのである。ゆえに before-after という時間的關係が成立しておらず, to の不使用が正当化されるのである。もちろん to がある場合はそれが想像できるのである。

why の広告の例で見い出されたような修辭疑問による手段が, 時には, how+原形不定詞構文でも見い出される。その例が次の(26)である。

(26) How deal with the man of today ?

この構文は where でも可能である。

(27) Where expect any better treatment ?

これらの構文でも before-after という時間的關係が成立しておらず, to の不使用が正当化されるのである。

もちろん, when, what でも同様のことが言える。

(28) When prepare for what will never come ?

(29) She was in utter despair. What give a multi-millionaire for his birthday ?

これらの構文でも before-after という時間的關係が成立しておらず, to の不使用が正当化されるのである。

ところで, wh 語+to 不定詞構文は, wh 語+原形不定詞構文が疑問形で生起するのに対して, 肯定形で生起すると考えられていた。しかし, 実際には, wh 語+to 不定詞構文が疑問形で生起する例も見い出すことができる。その際にはやはり before-after 關係が成立していると考えられる。しかし,

この場合、wh 語が指示するものの存在を想像できるということではなく、その同一認定のみがその scope に入ると考えられる。

- (30) Cuba: an arms blockade? Look at Castro now — cockier than ever with arms and agents to threaten the Americans. How can the United States act? Blockade is one answer offered by experts. In it they see a way to isolate Cuba, stop infiltration, maybe finish Castro too. This is the question now facing President Kennedy: How to put a stop to the Soviet buildup in Cuba and to Communist infiltration of this hemisphere? ...

ここでは、考えられている疑問文が、キューバにおけるソ連の勢力拡大をやめさせる手段の同一認定と関与していると言える。原形不定詞の場合は、当然異なる印象を与えていると考えられる。

コンテキスト内のある語句が、wh 語の指示物の存在ではなく、その同一認定に焦点を与えているのがより明確になっている場合もある。

- (31) How best to destroy your peace?

ここでは、best の使用により、この疑問文が相手の平和を破壊するのに最適の方法の同一認定と関わっていることを示している。

他の wh 語が to 不定詞疑問文をつくっている例として when と where の例を示す⁽³⁾。

- (32) When to marry and where to live? ...

この例もやはり、wh 語が指示するものの同一認定の指定を要求するこの出来事の潜在的 actualizer には選ぶべき選択肢が多すぎるとも言える状況である。

問題となるのは why + to 不定詞構文が疑問文で使われている場合である。

- (33) Consider the question now facing the referee evaluating this article: Why to recommend its publication?

この文は、refereeにとって、論文を受け入れる理由の存在の可能性について未決定であり、不定詞の出来事がなしとげられる理由を想定することができないわけではなく、想定されるかもしれないその存在理由を同一認定することが難しいということを示している。

要するに、この why+to 不定詞構文の場合に他の wh 語構文と比べて特徴的なのは、他の wh 語構文は、それが存在する状況、文脈を想定するのが容易だが、why+to 不定詞構文は不可能ではないがそれを想定し解釈するのに相当の知力を要するということである。つまり、wh 語+原形不定詞疑問文と wh 語+to 不定詞疑問文の明確な相違は、話し手が、wh 語が指示しているものの存在の conceivability について疑問をもっているか、単に聞き手にこの指示物の同一認定を求めているだけなのかである。

ここで独立節の全体的な分布の説明に移る。wh 語をもつ不定詞構造の分布の最も顕著な面は、肯定的な文脈における原形不定詞の欠如、即ち、原形不定詞は疑問文脈に限られるということである。このことは need や dare の用法と平行的である。そこでは、to 不定詞あるいは原形不定詞が疑問文の発話で用いられるのに対して、to 不定詞だけが肯定形で使われる。

(34a) Does he need to see a doctor?

(34b) Need he see a doctor?

(35a) He needs to see a doctor.

(35b) *He needs see a doctor.

Duffley(1994)で言われているように、need や dare を伴う原形不定詞は need や daring の存在の conceivability が話者によって疑問視されている時に生じる。ところが、(35a)のような肯定文では need の真の存在が主張されており to が使用される。一方、疑問文では、(34a)のように話し手が need や daring の存在を疑問視することに選択の余地がある形も可能であるし、

また、(34b)のようにその存在の conceivability を疑問視する形も可能である。

同じことが wh 語についても言える。疑問形では、話し手は、その存在が想定されていることの同一認定の指定を要求したり (wh+to)、何かが存在するかどうかについて疑問視したりする (wh+ ϕ)。肯定形では、話し手は、不定詞の出来事の実現のためにその理由・手段などの存在を主張せざるをえない。結果として、出来事の遂行のための前提条件が満たされていると感じられるのである。

次に、これまで見てきたように、なぜ why だけが他の wh 語と比べて特異な言語的振る舞いを示すかについて考えてみる。Bolinger(1957)や Quirk et al(1985)等での考察から言えることであるが、ここでの why の意味は、聞き手が行動をとるための適切な理由の存在を話し手が疑問視することによって、話し手が聞き手にその行動をしないようにしむけることであると考えられる。これは他の wh 語＋to 不定詞構文に対して why＋原形不定詞構文の排他的用法と言えよう。このことは、人が理由を考えるということは、ある種の判断を通して、理由を認識しようとしているその人に対して、理由の存在を確立させる行為であると言える。しかし、場所等を人が考えることはそれらの存在を確立させる行為とは言えない。この部分が決定的に違うのである。要するに、我々は何かをするための理由が想像できない場合、その理由が存在するとは想定できないのだから、その存在を疑問視するのである。つまり、場所等は外的世界にその存在を捜し求めることができるが、理由は、人の内的世界にしか存在しえないのである。

次に従属節での wh 語＋to 不定詞に移る。原形不定詞は従属節に生じないと考えられている。

- (36) Mr. Reama, who retired as vice president of the American screw Co. in 1955, said, "Both parties in the last election told us that we need a five per cent growth in the gross national product — but neither told us how to achieve it."
- (37) This baffling lack of distinct details recalls the secretary whose employer was leaving the office and told her what to answer if anyone called in his absence. "I may be back," he

explained, “and then again, I may not.” The girl nodded understandingly. “Yes, sir,” she said, “is that definite?”

- (38) We both had hangovers. Eileen declared she couldn't lift her head from the pillow. She lay under the covers making jabbing motions with her forefinger telling me where to look for the coffeepot.

どうして原形不定詞は従属節に生じないのだろうか？ wh+to 不定詞節は直接目的語の機能を持っており，主動詞によって表された出来事の中で動詞化されているものを evoke するためには，その存在が前提になっている項目のように指示物を evoke するものとして，wh 語が話し手によって認識されなければいけない。この結果，指示物の存在を前提とする全ての名詞と同様に wh 語は名詞として認識されるのである。ゆえに，原形不定詞は使用できない。wh 節は，従属節のコンテキストにおいて指示物の存在を前提とするという主張は(39)(40)のような語順の違いによって支持される。

- (39) What should we do on Thursday ?

- (40) She asked a question about what we should do on Thursday .

(40)では，what we should do on Thursday は前置詞の about の目的語として知覚されているので，疑問文のトピックを構成する項目としての存在が前提とされており，従属節において，疑問文の語順にすることができない。(40)のような語順になるwh節を動詞の目的語として認識する時，同時に，それが指示するものの存在を疑問視することはできないのである⁽⁴⁾。

ここまでの議論から，wh語+不定詞 (to あるいは ϕ) の生起に関しては，これまでは分布の問題，統語論の問題と見なされてきたが，実は semantic parameter を通して意味の問題として取り扱えるという強い主張をうかがい知ることができる。

2. D & E の問題点

1章で見てきたように、D & E では、序章でとりあげた4つの問題点に対して、彼らの提唱する3つのアプローチを利用して彼らなりの見解を示している。しかし、先に触れたように、その見解には問題があるのも事実である。本章ではそれについて列挙する。

- (1) D & E では、to の生起を before-after という時間的前後関係があるかどうかで説明しているが、その根拠が明示されていない。また、to の有無を、例えば、助動詞の問題にまで拡張しているが、それは overextension ではないのか？
- (2) D & E は、この問題を意味論的アプローチで取り扱っていると主張しているが、意味論全体の中での位置付けが明確でない。
- (3) D & E は、話し手によって wh 語がどのように知覚されているかを問題にしているが、聞き手の立場をどう扱うかが明確ではない。
- (4) why がここで取り扱った構文において他の wh 語と比べて特殊なのは明らかであるが、そのことについての D & E の説明は適切であろうか？
- (5) 例えば、I don't know *what to do*. は I don't know *what I should do*. に、ほとんど意味を変えずに書き直せるが、その際、to の有無は意味の変化を伴うという D & E の議論と抵触しないのか？

第3章では、これらの問題についての筆者の見解を述べて行く。

3. 代案

この章では、第2章で述べた問題点についての筆者の見解を述べて行くが、より包括的な理論の提示は、不定詞全体について論じる予定である別稿に委ねることにして、ここでは本稿で取り扱った問題のみに焦点を絞って論を進める。

まず、(1) についての筆者の見解を述べる。D & E では before-after とい

う時間的前後関係があるかないかでtoの有無を説明している。しかし、その根拠は全く明示されていない。筆者はここでは iconicity という概念を導入するのが適切だと考えている。ここでの iconicity という概念は、現実のある事象が、言語内の事象にも対応する形で反映されるというものである。toがある場合は、上述したように、before-after という時間的前後関係が成立する。つまり、そこに存在するのは、同時性ではなく、時間的な幅であり、それが、to という対応形で表現されている、即ち、現実の時間が言語に反映されているのである。toがない場合は、上述したように、before-after という時間的前後関係が成立しない。つまり、そこに存在するのは、同時性であり、ゆえに時間的幅がないのである。それがtoがないという形で表現されている。やはり、現実の時間が言語に反映されているのである。ただ、より包括的な理論でこの問題を論じる時には、直接性、間接性という考え方も同時に採用した方がいいように思われる。

toの有無を、例えば、助動詞の問題にまで拡張しているのがD&Eの特徴であるが、やはり、それは overextension だと筆者は考えている。かれらの見解に従うと、ニュアンスの違いは有るが、ほぼ同義で、言語的振る舞いもかなり共通している should と ought to, 未来の意味での will と be to 等は、全く異なるものとして処理されることになるが、それは経験的に正しいとは思われない。

(2)についての筆者の見解を述べる。D&Eは、この問題を意味論的アプローチで取り扱っていると主張しているが、意味論全体の中での位置付けが明確でないように思われる。もっと厳密に言えば、D&Eのアプローチは、次の(3)でも述べるが、話し手によってwh語がどのように知覚されているかを問題にしており、話し手、聞き手の発話への関与を特に問題にしている語用論的アプローチそのものであるように思われる。ゆえに、意味論を包括した形での広義の語用論アプローチと位置付けるのが妥当であるように思われる。

(3)についての筆者の見解を述べる。D&Eは、話し手によってwh語がどのように知覚されているかのみを問題にしているが、聞き手の立場についてもやはり、適切に位置付ける必要があると思われる。ここでは、話し手は聞き手がどのように認識してくれるかを想定して、発話を行うわけであり、

そこには、話し手の intentionality が感じ取れる。また、同時に、そこでは聞き手の acceptability が関与している。即ち、聞き手には、話し手の意図を理解できる acceptability があると、話し手は想定していると思えるのが、適切であろう。

(4) についての筆者の見解を述べる。場所等は外的世界にしか存在しえないが、理由は人の内的世界に存在しうるとして、why の、他の wh 語に対しての特殊性が主張されているが、これだけでは説明としては十分ではないように思われる。重要なのは、why の不定詞用法は他の wh 語の不定詞用法と比べて、特殊な言語的振る舞いを見せるということ、しかし、よく調べて見れば、不可能と思われていた用法が、例としては限られているが、可能であるということを説明することである。これは現実世界の反映という考え方を導入することによって説明できる。要するに、why＋to 不定詞を、疑問形で、D&E で述べられている before-after という時間的前後関係が成立する状況で使用しようとしても、その状況想定が、現実世界との関連においても、言い換えれば、語用論的に見て、かなり難しいと言えるのである。これを使用するような状況が、現実生活においてあまり多くないのである。筆者はこのような形での説明が妥当であるように思われる。

(5) についての筆者の見解を述べる。例えば、I don't know *what to do*. は I don't know *what I should do*. に、ほとんど意味を変えずに書き直せるが、その際、to の有無は意味の変化を伴うという D&E の議論とこのことは、明らかに矛盾すると思われる。やはり、to の有無は意味の変化を伴うという分析は、とりあえず、wh 語＋不定形の分析に限った方が妥当であると思われる。

この章では、D&E に対する代案という形で、筆者の見解を述べて来たが、この問題にはまだまだ未解決の点が数多く残されており、それについては、本稿では一切触れなかったが、近い将来、詳細な分析を行うことを考えており、本稿の不備についてはそれに委ねる事にする。

注

- 1 本文で述べた(4a)と(4b)の意味, ニュアンスの違いに関して, 米語と英語では違うとか, 個人差があるという指摘も見られるが, help という動詞に限っては to がある場合とない場合が共存するということは歴然たる事実であり, 言語形式が異なる以上何らかの意味, ニュアンスの違いが見られるはずであるというのが筆者の言語学的立場であるので, 本稿ではその線にしたがって議論を進めていく。
- 2 who+to 不定詞については, 特に例は挙げられていないが同様のことが言えると考えられる。
- 3 whoとwhatの場合については, 省略されている。
- 4 不定詞節の統後的機能により, 例えば I don't know why complain. が許容されるとすれば complain する理由の存在の可能性が疑問視されていることを含意する。結局, ここでも, wh 語は, その統語機能を果たすために, その指示物の存在を前提としなければいけないのに対して, 原形不定詞はこの指示物の存在の可能性が疑問視されていることを意味することが確認されている。

参考文献

- Bolinger, D.L., 1957. Interrogative Structures of American English: The Direct Question. University: University of Alabama Press, Publications of the American Dialect Society 28.
- Bolinger, D.L., 1974. Concept and Percept: Two Infinitive Constructions and their Vicissitudes. *World Papers in Phonetics: Festschrift for Dr. Onishi's Kijer*, 65-91.
- Duffley, P.J., 1992. *The English Infinitive*. London: Longman.
- Duffley, P.J., 1994. Need and Dare: The Black Sheep of the Modal Family. *Lingua* 94, 213-243.

- Duffley, P.J. and Enns, P.J. 1996. *Wh*-words and the Infinitive in English. *Lingua* 98, 221-242.
- Jespersen, O., 1940. *A Modern English Grammar (Part V)*. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Kruisinga, E., 1931 *A Handbook of Present-day English (Part II)*. Noordhoff: Groningen.
- Langacker, R. W., 1978. The Form and Meaning of the English Auxiliary. *Language* 54(4), 853-852.
- Leech, G.N., 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Poutsma, H., 1926. *A Grammar of Late Modern English, Part II, Section II*. Noordhoff: Groningen.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik, 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Wierzbicka, A., 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam and Philadelphia: Benjamins.